

青春18きっぷ、 ひと言列伝



函館市医師会
函館渡辺病院

水 関 清

今年もまた、青春18きっぷの季節がやってきた。その前身である「青春18のびのびきっぷ」が、当時の国鉄からはじめて発売されたのは、1982（昭和57）年3月1日のこと。6枚つづりで、販売価格は8,000円。1枚目は表紙、2～4枚目は青い地紋の乗車券で、有効期間1日が計3枚、5枚目は有効期間2日であった。6枚目は「青春18ワッペン」というシールで、バッグなどに貼付できた。意匠は赤い太陽、青い空、白い雲、緑の草原の中を真っ直ぐに伸びる白いレール、そしてスカイブルーで印字された青春18というロゴが群青色の枠で囲まれる、当時としては異色の6色刷り豪華版であった。

最大の特徴は、同年5月31日までの92日間のうちの任意の5日間に、5回（または、5人）で乗車すれば、1日（または、1回）あたり1,600円で、国鉄全線の普通・快速列車と連絡船に乗車・乗船できる点にあった。発売した国鉄の側にも周知の懸念はあったらしく、切符には「要は頭の使い方次第で旅がデッカクもチイサクもなります。時刻表をじっくりと見て、のべ5日間の乗車可能日を上手に使うって日本全国旅行にでかけてみてください」という指南があった。さらに駅頭掲示ポスターには、「青春諸君、自分の旅は自分でつくろう。普通列車専用きっぷが4枚ワンセット。どこへ行くかはキミの自由。一度に使えばビッグな旅。バラして使えば4回の旅。仲間と使えばグループ旅行」の文字が躍った。

当時の国鉄初乗り運賃は110円、10年前の1972年に30円だったそれは、1976年以降毎年のように値上げされて、鉄道輸送は減少していった。これを補うために国鉄は、1970年の「DISCOVER JAPAN」、1972年の鉄道100年、1978年の「いい日旅立ち」と、つぎつぎに需要喚起型キャンペーンを打ち出した。こうした企画とはやや視点を異にするのが、1980年の「いい旅チャレンジ20,000km」であり、その延長線上に、翌1981年に発売された「2人の年齢の合計が88歳以上の夫婦で、同一行程で旅行する場合にグリーン車が乗り放題」となる「フルムーン夫婦グリーンパス」と、翌々年発売の、旅程の工夫次第で、時間はかかるものの遠くまで行ける「青春18のびのびきっぷ」が位置するのである。

具体的な旅程の提案の出来栄にその成否が左右されがちとなる「DISCOVER JAPAN」に対して、「青春18のびのびきっぷ」は旅の手段を普通列車に限定するだけで、旅程の策定については利用者まかせであり、「フルムーン夫婦グリーンパス」は、熟年夫婦のリフレッシュの機会として、旅の非日常性

を象徴するグリーン車を乗り放題としている。両切符とも、その先には国鉄全線乗りつぶし、すなわち「チャレンジ20,000km」を見据えていたのである。

「時間はかかり体力勝負の面はあるものの遠くまで行ける、ひたすら安価な切符」と、「日頃は縁遠い存在であるグリーン車の上質なサービスを、お手頃価格で利用出来る切符」。これらの新機軸はともに、型にはまった日常からの脱出の契機としての「いい旅」を目指すお手伝いとして提供されるが、旅に出かける前・旅の途中・旅の後、という3段階の愉しみを意図した企画なのである。すなわち、旅程の工夫次第で、その価値を自由自在に高められ、旅の後には乗車区間を記録して旅の記憶を定着させ、次の旅への期待に変えることも可能となる。事実両切符は、国鉄時代から2020年の現在に至るまで、発売が継続されている人気商品に成長している。

歴代のキャッチフレーズから、この切符の魅力を探ってみよう。1983年：「青春、on the road」、1984年：「青春王者よ。行け。」、1985年：「のってるかい 青春の旅は音符みたいだろ」「ドラマはこれからだ。」「十八少年漂流記。」と、当初の青春路線は健在である。国鉄民営化前夜の1986年：「全国出逢いの旅 思い出の、前売り鑑賞券です。」字句に添えて、ほほ笑む女性の姿も配され、新しい客層の取り込みを狙う意図がうかがえる。

JR化後5年目の1991年夏からは「線路の先の物語。」シリーズが始まる。「誰も私を知らない。」「寝坊したら、すごくソシた気がした。」「スポンジみたいに、たっぷり夏を吸い込んだ。」など、短いながらも余韻を残す字句が選ばれた。1997年夏からは、短いフレーズと鉄道の要素をしっかりと撮影した1枚の写真とから構成されるものに変更された。1998年：「駅に着いた列車から、高校生の私が降りてきた」、1999年：「思わず降りてしまう、という経験をしたことがありますか」、2000年：「前略、僕は日本のどこかにいます」、2002年：「冒険が足りないと、いい大人になれないよ。」、2005年：「あの頃の青を探して。」、2006年：「この夏の新色です。」と続き、2008年冬からは「青春18きっぷ」のロゴに副題を添えた方式になった。さらに2010年夏からは、夏・冬・春という1シーズンを通した副題が加えられた。2010年：「旅と、時間と、青春18きっぷ」、2011年：「今こそ、列車の旅をする。」、2012年：「知らない日本へ、列車に乗って」、2013年：「それぞれの青春をのせて」、2014-2015年：「その一瞬が一生の思い出になる。」、2016-2017年：「旅情あふれる名の駅へ。」と続き、2018年からは「列車の灯りに誘われて。」というシリーズが始まり、2020年春に至っている。

これら副題をあらためて通覧してみると、「切符を通じての、型にはまった日常からの脱出としての旅の機会の提供」という、「青春18のびのびきっぷ」の企画理念は、発売から38年の時を経て、令和時代の今なお健在なのである。